

---

# つよきやらっ！

TAIGA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

つよきやりつ！

### 【Zコード】

Z5508X

### 【作者名】

TAIGA

### 【あらすじ】

『く普通の高校生』『高中 晓斗』の周りには、どんなにもヒロインばかり！

ワガママ放題やりたい放題の姉『高中 由希奈』

誇り高き最強のストーカー『武藏野 瑠夏』

心優しい孤独な殺氣エンジェル『仲川 霞月』

天然ちやーはん娘『蕪木 奈々』

元気いっぱいハイテンション爆発娘『羽田 水月』

そんな彼女達に日々振り回される暁斗のドタバタ学園ストーリー  
ここに開幕！！

## 高中姉弟の朝

世の中には理不尽といつものがまかり通りにいるものだと、高中曉斗（たかなか　あきと）は常々感じている。

例えば今、曉斗の前に「立ちしている姉……高中　由希奈（たかなか　ゆきな）がその象徴ではないだろうか。

由希奈は「…」。

「暑い！　蝉煩い！　ちよびといこわ　曉斗、蝉を殺しに行くならついでにアイス買ってきなさい…」

……確かに今は夏で、朝とはいえ気温は高く、外で大合唱する蝉達の鳴き声もかなりの物だ。

加えて曉斗は外出しようとした玄関に向かつてはいたが、それは学校に行く為で、決して蝉を虐殺しに行く為ではない。

「あのさ……朝っぱらから何を言つてんの？　俺が今蝉を殺しに行くよつに見える?」

曉斗は着ている制服を指で摘むと、呆れ顔で由希奈に問う。

由希奈は腕組みをしながらマジマジと曉斗を眺めると、やせせついた様子で口を開いた。

「蝉殺すのに服装なんて関係ないわっ！　要は心意氣。そつ、心意氣なのっ！…」

……眞つていい事がめちゃくちゃだ。

暁斗は半分諦めた顔で由希奈を見る。

小柄な身体に腰まで伸びた長い髪、そして童顔で可愛らしい顔付きをしている由希奈は、パツと見た感じでは優しそうな女性といった印象を受ける。

実際、彼女が開業している『高中診療所』ではその見てくれに騙された患者が、彼女田端にて足を運ぶという現象が起こっているのだ。

「とにかくせ……俺は学校に行くんだよ。それに仮にも姉ちゃんは医者だろ？ 医者が殺す殺す言つてるのも問題じゃないの？ 蟬だつて一週間しか生きられないんだから簡単に殺しちゃつたら可哀想だろ」

暁斗が諭すように言つと、由希奈はいきなり暁斗の田前まで勢いよく詰め寄る。

「なつー?..」

慌てる暁斗。

そんな暁斗の両肩を掴み、由希奈は真剣な眼差しを向けた。

「……暁斗、よく聞きなさい。世の中は弱肉強食。強い者が勝ち、弱い者は淘汰されるの。分かる？ お姉ちゃんはそれを暁斗に学んで欲しいの。ううん大丈夫！ 例え暁斗が外で狂喜乱舞しながら蟬を虐殺してその骸を貪り喰つっていても貴方は私の可愛い弟。お姉ち

やんは決して見放したりドン引きしたりはしないわ？ だから安心して殺戮の天使になりなさい」

「しねえよつ！ 何で俺がそんな危険なキャラになりなきゃいけないんだよ！ もついいつ！ 俺は学校に行くからな！」

支離滅裂な姉を突き飛ばすと、暁斗は玄関の扉へと踵を返す。

「あーもつアツタマ來た！ お姉ちやん超頭きたつ！ しづなつたら今日きた患者全員に『それは恋の病です』って言つてやるつ！」

「いや、それはやめとけっ！ 大変な事になるからー。頼むから診察だけはまともにやつてくれっ！ ……」

膨れつ面で暴れる由希奈に慌てて詫びを入れる暁斗。

「……じゃあ帰りにアイス買つてきて。200円のやつ」

「……はい、よひーんで」

よつやく落ち着いた姉、由希奈に釈然としない気持ちを押さえながら暁斗は玄関の扉を開ける。

「……今日も騒がしい一日になりそうだ。」

夏の陽射しに田を細めると、暁斗は学校へ向かってゆっくりと歩き出した。

## 高中姉弟の朝（後書き）

閲覧ありがとうございます。

この作品は、筆者の執筆時間の関係上一頁あたりの文字数が少なめになつております。

長くすると、いつになつたら次話投稿出来るか分からず、万が一にも続きを待つてくれている読者様（恐らく居ないとは思いますが）がいたら申し訳ないと想い、少ない文字数で分割しながら投稿させて頂きます事を御了承下さい。

## 武藏野 瑞夏の朝

早朝五時。

「……九千九百九十八！ 九千九百九十九！ 一万つ……」

武藏野 瑞夏（むさしの るか）は田課としている正拳突き一万回を終え、静かに突き出していた拳を下ろした。

その前に三十キロに及ぶランニングをこなしているのだが、瑞夏の呼吸は全く乱れる気配はない。

「さて……朝の鍛錬はこのくらいでいいかな？」

軽くストレッチをしながら、横田で倒れ込んでいる男達見る。

二十人はいるであろう屈強な男達は、すでに息も絶え絶え死屍累々といった状態で、全員横たわっていた。

これは武藏野流空手道場の庭で毎朝見られる光景で、別段珍しい物でもない。

その中で唯一平然と立っている瑞夏が、溜息混じりで頭を振る。

「全く情けないな。お前達、田頃の鍛錬が足りないんじゃないのか？」

肩で綺麗に切り揃えた髪をかきあげると、やや厳し目の言葉を男達

に投げ掛けた。

すると男達の一人……恐らく武蔵野流道場の門下生なのであらう、鋭い視線で見据える瑠夏に向かつて口を開いた。

「し、しかし師範……。流石に三十キロランニングと、前回し蹴り五千回、後ろ回し蹴り五千回、正拳突き一万回のメニューはハード過ぎます！」

そう、この男が言つ通り瑠夏は女子高生にして武蔵野流空手道場の師範である。

しかもその強さといつたら周囲から『鬼神』と呼ばれる程だが、凛とした真っ直ぐな眼差しと、面倒見の良さから彼女を慕う者も多い。

何より、瑠夏は美人である。

## 武藏野 瑠夏の朝2

「それでは私は学校に行かなければならぬので血室に戻るといふ。全員、鍛錬を怠らないよう」

「」

言いながらその場を立ち去る瑠夏。

その、何處までも凛とした後姿に門下生達の誰もが目を奪われた。

生まれてすぐに母親を亡くし、拳聖と呼ばれた父に育てられた瑠夏であったが、その父まで三年前に亡くし、それからというもの若い身空で道場を引っ張つてきたのである。

それだけの物を背おつた瑠夏の背中は、計り知れない大きさを感じられた。

「押忍……」

門下生達はハードワークの為に動かない体に鞭を打ち、瑠夏に向かって頭を下げた。

「……ふう

シャワーを浴び、道場の一階にある血室に戻った瑠夏は部屋に入るなりに深い溜息を漏らす。

「……あ、……あ

瑠夏は妙な声を上げながら恍惚とした表情で部屋をぐるりと見渡した。

やがてヘタリと力無くその場に座り込む。

「あきとおー！」

瑠夏の視線の先には、部屋中に貼られた大小様々な暁斗の写真。

無論、全て隠し撮りした物である。

「あきとアキト暁斗おつーー！」

瑠夏はベッドに置かれた、暁斗の姿がプリントされた等身大抱き枕に向かって、勢いよくその身を投げる。

「はあ……暁斗」

抱き枕に顔を埋めた瑠夏は、ウツトロとした瞳で本田何回目かの『頭ナデナデしても良いんだぞ?』

『暁斗』を呟く。

「あのな暁斗。今日もるかちゃん朝練頑張つたぞ?えらいぞつて頭ナデナデしても良いんだぞ?」

潤んだ瞳で抱き枕に話掛ける瑠夏。

そう、これが鬼神じやない方の武藏野瑠夏である。

転校してきた高中暁斗に一目惚れしてしまった瑠夏は、見事にストーカーと化した。

幼い頃から武道しか知らない瑠夏は、その気持ちをどうしたら良いのか検討が付かなかつた。

その結果がコレなのである。

「あつー。」

フと時計（暁斗の顔が印刷された特注品）を見た瑠夏が慌ててベッドから飛び起きる。

「もうすぐ暁斗が家を出る時間じゃないか！　いつしてはいられな  
いー！」

瑠夏は驚く程の速さで制服に着替えると、学校……いや、暁斗の住む高中診療所へと向けて走り出すのであった。

## 仲川 皐月の朝

仲川 皐月（なかがわ さつき）は、いつものように自宅近くの公園へと散歩に来ていた。

手にはビニール袋に入れられた三枚の食パン。

中規模程度の公園には多くの鳩が生息していて、動物好きな皐月は毎朝散歩がてらに鳩達に餌を与えていた。

早朝の公園には犬を散歩させている人達もちらほら見受けられ、その犬を眺めている事も皐月のお気に入りだった。

「ほら、沢山食べてね」

いつものベンチに腰掛けた皐月が食パンを細かく千切つてばら撒くと、どこからともなく鳩達が皐月の周りに群がってくる。

やや茶色がかつたセミロングの髪が陽に照らされ、可愛らしい外見の皐月が鳩達に囲まれている姿はとても絵になつている。

「あれ？」

食パンを千切っていた手を止め、皐月は何かに気が付いたかのように前方に目を向けた。

視線の先には公園の外の道を猛スピードで走っていく武藏野瑠夏の姿があった。

その後にやや遅れて道着を着た男達が続く。

瑠夏に比べ、まるでボロボロのゾンビの様だった。

「武藏野さんだ……」

皐月は深く溜息を吐く。

皐月と瑠夏は同じクラスである。

活発で、誰からも慕われているいわばリーダー気質の瑠夏は、内気な皐月の憧れだった。

「……お友達になつてくれないかなあ」

そう呟く皐月には実は友達と呼べる人間が一人もいない。

優しく、他人思いで、性格の良い皐月ではあったが、幼少の頃から友達が出来た試しが一度もなかつた。

それは高校に入学してからも変わらず、高校一年になつた今でも孤独な毎日を送っているのだ。

「はあ……」

項垂れながら、一度目の深い溜息を漏らす皐月。

## 仲川 皐月の朝2

「…………帰る」

手に持つた食パンを全てばら撒き終えた皐月が、しゃんぼりとしながらベンチから立ち上がる。

その時だった。

「おはようござこます」

犬を散歩していた老人が皐月に話し掛けてきた。

老人は毎朝鳩に餌を『えている皐月を犬の散歩中に見ていて、心なしか元気がない皐月を心配して後ろから声を掛けたのである。

「……………！」

その瞬間の事だった。

皐月の身体が大きくビクンと跳ね上ると、途端に硬直し始める。

ギシギシギシッ！－！

そんな音が聞こえてきそつなぎこちない動きで、徐々に首を老人の方へと向ける皐月。

「お、お、お、おは、おはオハオハ……」

奇妙な声を上げる皐月の周囲にある大気が震え出した。

バサバサバサツ！！

大気の異常を敏感に感じ取つた鳥達が一斉に大空へと飛び立つてい  
く。

握り締め過ぎた拳からはポタリポタリと血が滴り落ち、噛み締めた  
唇の端からも一筋の血が流れ落ちる。

その姿はもうこの世の者とは思えない恐ろしさで、事実声を掛けて  
くれた老人はどうに腰を抜かし、金魚の様に口をパクパクさせてい  
た。

ちなみに連れていた犬は、とつぐの昔に逃げたしていた。

そうしている間に、今や夜叉と化した皐月の身体からドス黒いオー  
ラが立ち込めてくる。

それは殺氣と良く似ていた。しかも莫大なものである。

「おおお、おはオハツ！ おはよハジセコマツツツツツ…  
つて、あら？」

ようやく皐月が挨拶を返せた頃には、老人の姿はもうそこに無かつ  
た。

それどころか、皐月の半径100mに動く物の姿すら見えなくなつ  
ていた。

これが皐月に友達が出来ない理由である。

極度の上がり症、赤面症である皐月は、他人と接した時に緊張のあまり絶大なる殺氣を放つ。

それに恐れをなした人々は、皐月に恐怖心を刻まれて近寄らなくなってしまうのだ。

「はあ……またか」

いつもの結果にガックリと肩を落とし、皐月は学校の支度をすべくトボトボと家へと帰つて行つた。

# 蕪木 奈々の朝

「ふわあつ！？」

叫びと共に勢い良くベットから飛び起ると、無木奈々（かぶらぎ なな）は肩で息をしながら部屋を見渡す。

「悪かつた。良かつた。」

額から流れ落ちる汗を手で拭うと、安堵の表情を浮かべた。

酷く恐ろしい夢だった。

奈々は「かみた悪夢を思し返し、あまりの恐れに震ふる。  
もし現実に夢でみた様になつてしまつたのならば、奈々は生きてい  
く自信がない。

奈々は呟く。

「ちーせん……」

奈々がみた悪夢とは、IJの世から全ての炒飯が消えてしまつ夢。

そう、蕪木奈々は無類の炒飯好きなのである。

奈々を知る人々は、彼女が炒飯以外を食べている姿を見た事がないと口を揃えて証言する。

すっかり田が覚めてしまつた奈々は、もそもそビットから抜け出すと、机の上に置かれた[写真立て]を手に取つて一ココと微笑む。

「おまよひさんです。 うやーほさんー。」

[写真立て]には出来たての五田炒飯の[写真]。

無駄に高画質である。

朝の挨拶を済ませた奈々は、部屋を出るとコンビングまで移動する。母が朝食の用意をしているのであり、キッチンから良い匂いが漂っていた。

「おまよひさんです。 ねぬさん」

「おまよひ奈々。 もうすぐ朝食が出来ますから、椅子に座つて待つてて下さいね」

奈々の母親である朱理（あかり）はにこやかに娘に微笑むと、大力で中華鍋を振るい始めた。

## 藤木 奈々の朝2

「ふおおおっ！ お母さん凄いです！ 炎です！ 炎を完全に従わせていますっ！！」

我が母の鍋捌きを眺めながら、異様に興奮する娘。

「ふふふ…… 大丈夫よ奈々！ 貴女もいつか炎を自由自在に従わせる事が出来るわっ！ だつて、貴女は私の娘ですもの……」

言いながら朱理は一際大きく鍋を振ると、黄金色に輝く……炒飯がキラキラと輝きながら宙に舞う。

そして炒飯は朱理が素早く構えていた皿の上に綺麗に乗った。

「ふおおおおっ！ お母さんっ！ お母さんっ！」

奈々のボルテージは最早MAXである。

朱理は朱理で、炒飯が乗った皿を持ったままクルリと回転すると、ビシッとポーズを決めていた。

「さあ召し上がれ」

その後大人しくテーブルの席に着いた奈々の前に、朱理特製五目炒飯が置かれる。

キラキラ輝く炒飯をうつとりと眺めていた奈々は、やがて神妙な顔付きに変わり始めた。

「お母さん……」

「ん? どうしました?」

奈々の対面に腰を下ろした朱理が優しく微笑む。

奈々はもじもじと身体を揺すりながら口を開いた。

「ちやーはんさんが愛し過ぎて生きていくのが辛いです……。お母さんはそんな事ありませんか?」

「ないから安心しなさい」

「……セツですか」

娘のおかしな質問にも、変わらずの微笑みを絶やさない朱理の返答に、何故かホッとした様子で五田炒飯に箸（蓮華）をつける。

「ふおおつー 最高ですつーー 完璧ですーあえて言つなうば完璧ですー」

五田炒飯を一口食べた奈々は大きな瞳をより一層大きく見開くと、歓喜の声を上げた。

「完璧を二回言つましたよ? それでね、奈々。セツさんの質問なんですが、お母さんの意見を聞いてくれますか?」

「ふあー? なんれすか?」

狂喜乱舞しながら五目炒飯を食していく奈々に、朱理は飽くまで優しい口調で語り掛けた。

「奈々は言いましたね？ ちやーはんさんが愛し過ぎて生きるのが辛いと。でもね？ 生きてていなければ、奈々は炒飯を食べる事が出来なくなってしまうのですよ？」

「ふおつ！？」

瞬間、奈々のバックに稻妻が走った。

すでに食べ終えた五目炒飯の器に蓮華をおくと、茫然自失といった感じで天を見上げる奈々。

「そうでした……。辛くとも生きていなければ、私の全国ちやーはんさん制覇が成される事はないのでした……」

そんな奈々の様子を見て、朱理はクスリと笑う。

「でしょ！？ それならば頑張りなさい！ わあ、そろそろ支度をしないと学校に遅刻してしまいますよ？」

朱理がチョイトイと指で時計を指すと、奈々は慌てて立ち上がった。

「ふおつ！ もう！」んな時間ですか！？ 流石ちやーはんさん！ 時が経つのも忘れさせます！？」

奈々は朱理に「馳走様をすると、急いで身支度を整え、家を飛び出していく。

## 羽田 水月の朝

規則正しく時を刻み続ける田覚まし時計の針が、アラーム設定された時刻に近づいていく。

「とうつーー！」

今正にその能力を發揮しようとしていた田覚まし時計にチョップを喰らわし、田覚まし時計の最大の能力であるアラームの発動を阻止する人物がそこにいた。

それはこの部屋の主、部屋にあるのも全てを支配する言わば絶対神、羽田 水月（はだ みつき）である。

「ふふうん！ やつてやつたですよ？ 每朝毎朝私を苦しめる田覚ましに、正義の鉄槌を食らわせてやつたですよー！」

アラーム設定された時刻を過ぎて、今やただの時計と成り下がった田覚まし時計を眺めながら、水月は不敵に微笑む。

「完全勝利っーー。遂につくき田覚まし時計に勝利した水月ちゃんなのであつたーー！」

両拳を高く突き上げ、勝利の喜びを体全体で表した水月は、そのままの体制でベットへと倒れ込んだ。

「せひせひー早起きもしてしまつたし、時間に余裕もあるなあ？ どうしようかなあ？ などと言いつつ、戦いの後の休息をとる水月

ちやん！

独りで戯言を呟きながら目を綴じる水月。

彼女の呼吸が寝息へと変化するまでに五秒掛からなかつた。

ちなみに、水月は別名『遅刻魔』『カリスマ遅刻師』『呼んでも来ないバハムート』等と呼ばれ、『千の異名を持つ女』の称号を欲しきままにしている。

完全に夢の彼方へと旅だつてしまつた水月の至福の時間は、学校の始業時間五分前まで続くのであつた。

## 羽田 水月の朝2

「……………」

夢の世界のミラクル大冒険から帰還した水月は、無情にも現実の時を告げる田覚まし時計を凝視しながら呟いた。

「うそうそうそうそつ！ ヤバイじゃん！ 超ヤバイじゃんつ！  
！ 遅刻だよ？ 完全に遅刻だよ！」

あまりの衝撃に気が動転しているのだろう水月は、田覚まし時計を持つたまま立つたり座つたりを繰り返す。

「うぬう……田覚まし時計め！ あたしに敗北したからといつて卑劣なマネを……！」

100%自分の責任なのだが、その事実を棚に上げながら急いで制服に着替える水月。

「ああもうっ！ 髪ボサボサじゃんつ！」

言いながら慣れた手付きで水月のトレーデマークであるポニーーテールを完成させると、足早にリビングへと駆け出す。

「ママッ！ どうして起こしてくれなかつたの！？ おかげ様であなたの可愛い娘さんが今まさに大ピンチ……って、アレ？」

リビングに繋がるドアを開けると同時に文句の矢を飛ばした水月の

動きが止まる。

リビング、キッチンには誰の姿も見えないのだ。

「んんん～？ 何コレ？」

設置されたテーブルの上に置かれた紙に気が付いた水月は、それを手に取ると、しげしげと眺める。

『水月へ。

暑いからパパと二人でちょっと旅行に行つてきます。

朝御飯は用意してあるのでチンして食べてね！』

「.....」

一通り手紙を読み終えた水月は、無言で手紙の横に置かれていたコーンフレークに視線を移す。

「チンしてつて.....どないせえつちゅ～んじや」

見事両親に置き去りにされた水月であったが、自由人である両親のこの行動にはすっかり慣れてしまっている。

「まついつか！ コーンフレークは世界の朝食～」

コーンフレークを器へと移した水月は、鼻歌交じりで冷蔵庫の扉を開いた。

その瞬間、開けた扉を勢いよく閉める。

「牛乳ないじゃんっ……。」

冷蔵庫の中には塩辛の瓶しか入っておらず、水月は怒り心頭である。

「牛乳がない」「ーンフレークなんて世界にほとても及ばないよっ！  
せいぜいセ界！ セントラルリーグだよっ！－！」

意味不明な言葉を発しながら器に盛られた「ーンフレークを指差す  
水月。

やがてハッと我に還ると、遅刻確定な現実を思い出す。

「わわわっ！ いけやいられないっ！ 行かなきや！ 可憐に優雅  
にダイナミックに……。」

水月は喚き散らしながらカバンと「ーンフレークを手に取ると、大  
慌てで家を飛び出して行った。

「まつたく……我が姉ながら困ったもんだな」

家を出た暁斗は頭を搔きながら独り言ちる。

あれで医師が務まるのだから世の中不思議なものだ。

「……ん？」

そんな事を考えていた矢先、何かに気が付いた様子の暁斗が歩みを止めた。

物音がする。

それは高中診療所の横、「ゴミ置き場」として利用しているスペースから聞こえてきた。

「ゴミ」の回収日までの間一時的に保管しておくそのスペースには、稀に野良犬や鴉等が「ゴミ」を漁りに来る事がある。

ガサガサと「ゴミ袋を漁る様な音から察するに、また動物達が荒らしに来ているのだらう。

「つたく、朝っぱらから勘弁してくれよ。後片付けが大変なんだから」

暁斗は「ゴミ」を漁る動物を追い払うべく「ゴミ置き場へと向かい始める。

「え？」

「ゴミ置き場に近づくにつれ、ガサガサとゴミ袋を漁る音と共に、聞こ覚えがある声が耳に入ってきた暁斗が再びその歩みを止めた。

「…………」こんな所にゴミを置いておくなんて仕方がない奴だな暁斗は！ 私だから良い様なもの、もし変質者がゴミを漁りに来たら一体どうするつもりなんだ！」

そこにはブツブツと文句を言いながらゴミを漁る人物がいた。

武藏野瑠夏である。

「世の中にはストーカーや変態が山程いるからな！ やはり私が監視して守つてやらねばならないか……。フフッ！ 暁斗め、私がいないと何も出来ないんだな？ 可愛い奴め」

ニヤニヤしながらゴミを漁る瑠夏は、完全にただの変質者にしか見えなかつた。

その時、瑠夏が一際大きな声を上げた。

「おおっー、うー、これはっー、暁斗の使い古しのトランクスじやないか！！」

まるでゲームの主人公がお宝アイテムを発見した時の様に、高々と空に掲げて歓喜する瑠夏。

「これは……こんな……やつよ？……」  
辛抱たまらんではないか——

迷わず瑠夏はトランクスに顔を埋め始める。

「……武藏野？」

「あ

我慢も限界にきた暁斗が引き攣りながら声を掛けると、驚いた表情の瑠夏が振り返る。

## 登校風景2

暫しの沈黙の後、瑠夏は静かに立ち上がると、制服のスカートに付着した埃を手で払いながらニコリと微笑む。

「おはよう暁斗。偶然だな？ 折角だから一緒に登校しないか？」

「いはーいのは偶然とは言わん！」

さながら何事も無かつたかの様に振る舞う瑠夏に、暁斗が思わずツツコミを入れる。

……が、当の本人は全く気にしてすらいない様子だ。

それどころか不満顔で暁斗を睨み付けている。

「暁斗はいつまで私の事を武藏野と呼ぶんだ？ そんな他人行儀な呼び方では寂しいだろ！ 別に私は嫁とか家内とかカミさんとかハニーとか呼んでも全然構わないんだぞ？」 といふが、寧ろ望むところだ

「ちょっと待て！ それ全部呼び方は違うが意味合いは一緒だろつ……もういい。俺はもう行くからな」

付き合つていられないと言わんばかりに背を向けて歩き出す暁斗。

「あつ、待てっ！ 分かった！ せめて名前… 名前で呼んでくれ！ 今はまだそれで我慢するから…！」

手にしつかりと握り締めていたトランクスをカバンにしまつと、瑠夏は慌てて暁斗の後を追つ。

毎朝無理矢理な設定の偶然を装い待ち伏せる瑠夏と一緒に登校するのは、暁斗にとつてはもう当たり前になつていた。

暁斗は思い返す。

『暁斗！ お姉ちゃんは一人じゃ寂しいから引越してきなさいっ！  
！ 断わるなら一生地味な嫌がらせを受ける覚悟をする事！ いい  
わね？』

元々決して都會とは言えないこの小さな田舎街で診療所を開業していた姉、由希奈は、遠く離れた都會に住む親許で、高校生生活を送つていた暁斗をその一言で転校させた。

由希奈はやると言つたら本当にやる女だといつ事を、暁斗も両親も嫌といつべりい思い知らされていたのである。

そして転校してきた一田田から、三ヶ月に至る現在まで、瑠夏に付き纏われ続けている。

「なあ暁斗、一つ聞いてもいいか？」

暁斗の横まで追い付いた瑠夏が、やや聞き辛そうに口を開く。

「何だ？」

「いや、以前から頻繁に暁斗の家に忍び込んでいたんだが、御両親の姿を御見かけした事がないものでな？ 少し気になっていたんだ」

問題発言をサラリと口にする瑠夏。

無論、暁斗にとつては聞き捨てならない事である。

「何をそもそも当然な事みたいに言つてんだよ！ 犯罪だろそれ！？ いつだ？ いつ忍び込んでんだ！？」

猛烈な勢いで喰つて掛かる暁斗だが、瑠夏は涼しい顔で人差し指をチツチツと横に振る。

「暁斗、今大事なのはそこじゃない。御両親の件だ。このままだと私を紹介する時に困るだろ？ 未来。そう、お互いの未来に関わる重要な事なんだぞ？」

「…………」

瑠夏といい、姉といい、どうして自分の周りには何を言つても無駄な人が多いのだろう?

暁斗は全てを諦めて話を続ける事を選択した。

「俺の親は離れて暮らしてるよ。俺だけ姉貴に呼ばれて強引に転校させられたからな」

「……そつか」

事情を聞き、瑠夏は神妙に頷く。

「では、今は暁斗と御義姉様と嫁である私の三人暮らしがいつ事になるな? 手に手を取り合つて頑張つていこうではないか」

極上の笑顔を咲かせる瑠夏。

「何でそつたんだ!? いつお前が嫁に来た! それと御義姉様とか呼ぶなっ!!」

「……！ ちょっと待て暁斗！」

そんなやり取りを繰り返していた時、突然けたたましいクラクションの音が響き渡った。

二人は会話を止め、咄嗟にクラクションの音がした方へと目を向ける。

「危ないっ！！」

視線の先は車道。

そこに歩道を歩いていた一人の女性が、フラフラと吸い寄せられるように飛び出して行ってしまったのだ。

女性の目前には中型のトラックが迫っている。

突然の飛び出しに、トラックの運転手はクラクションを鳴らしながら急ブレーキを踏むが、元々スピードを出し過ぎていた為に止まりきれない事は誰が見ても明らかだつた。

大惨事が起こる。

誰もがそう思った。

暁斗も思わず目を背ける。

この位置から現場までは100m近くある。どうあがいても女性を救出する事は不可能だ。

そして周囲にいた人間もまた、金縛りにあつたかの様に動く事が出来ないでいた。

その時である。

周囲のざわめきに、暁斗は横に晒たばずの瑠夏の姿が見えない事に気が付いた。

「武藏野！？」

ハツと車道へ視線を戻すと、すでに女性ヒトラックの間へと到着している瑠夏の姿がそこにあった。

しかし、女性を抱えて救助するには時間が無を過ぐる。

このままでは瑠夏まで一緒にヒトラックに巻き込まれてしまひだらう。

「……………」

暁斗は思わず走り出した。

今更間に合わない事など分かつてゐる。

しかし、考えるより先に体が動いてしまつてゐた。

その刹那、瑠夏の怒号が響き渡る。

「武藏野流——」

言いながら左足を思い切り踏み込んだ瑠夏の足元のアスファルトが、その衝撃に耐え切れずドンッ！と音をたてて陥没した。

「鉄閃掌つ——」

次の瞬間、腰、肩、腕と見事な捻りを加えて突き出した瑠夏の右掌底が、迫ってきたトラックの前面に触れる。

ドオンッ！――！

壮絶な衝突音が聞こえたかと思つと、トラックは縦に大きくバウンドしてその動きを止めた。

「スピードの出し過ぎは感心しないな」

ゆっくりと右手を下ろす瑠夏。

これが数々の格闘技大会で優勝を総ナメにし、いかなる試合でも不敗を誇る『鬼神』武蔵野瑠夏の姿である。

「む、武蔵野！」

田の前の信じられない出来事に畳然とする暁斗。

瑠夏は暁斗に振り向き、ニッコリと笑つ。

「武蔵野ではなく『瑠夏』だろ？ 暁斗」

その表情は、すでに鬼神から暁斗命の瑠夏に戻つていた。

「よつこいらじょつひとー。」

大騒ぎになつてこる車道を尻田にて、瑠夏は放心状態の女性を抱えて颯爽と歩道で立ち尽くす暁斗の許へ戻ってきた。

「お、おい、大丈夫か？」

やや動転氣味の暁斗の言葉に、瑠夏は微笑みを返すと静かに抱えていた女性を地面に降ろす。

瑠夏も女性も全く無傷な様だ。

「あれ……お前……」

暁斗は降ろされた女性の顔を確認すると、驚きの声を上げる。

「蕪木？　蕪木じゃないか！？」

救出された女性は蕪木奈々。

暁斗や瑠夏と同じ学校の生徒である。

「ふおお？」

ボーッとしていた奈々は、暁斗の声にピクリと反応するとい、大きな瞳を暁斗に向かた。

「おや、高中くんではないですか。おはようさんです」

のほほんとした声で挨拶をする奈々。

それは直前にトラックに撥ねられそうになつていた人間が出する声とは思えない程、香氣な挨拶だつた。

「な、何だ暁斗？　し、知り合いなのか？」

言葉を交わす二人を見て、瑠夏は眉をひそめる。

恐らく、自分以外の女性と話しをしている事が引っかかっているのだろう。

「ああ、同じクラスのやつなんだ」

「無木奈々です。よろしくです！」

ここやかにペコっとおじぎをする奈々。

それとは対照的に表情を強張らせる瑠夏。

「なななな何だと…？　お、お、おお同じクラスだとおつ…？」

ワナワナと肩を震わせる瑠夏は2年B組。

暁斗と奈々は2年C組で、瑠夏とはクラスが違う。

「……そつか、ならば仕方ない。残念だ……非常に残念だ」

瑠夏はゆらりと奈々に近づくと、そのまま抱きあげて車道へ向かい歩き出した。

「おじちょっと待てって！ 何が仕方ないんだよっー？ 非常に残念つて何ー？」

怪しい笑みを浮かべながら奈々を死地へと誘う瑠夏を、暁斗が必死になつて止める。

「蕪木、大丈夫か？」

悪鬼と化した瑠夏から何とか奈々を奪還した暁斗が心配そうに尋ねると、奈々は特有のふんわりした笑顔で大きく頷いた。

「大丈夫ですよ。心配してくれてありがとうございます！」

そんなやり取りを膨れつ面で睨みつけている瑠夏は、フと思い付いたように両手を胸の前でポンと合わせる。

「ああつ！ 痛あいつ！－」

いきなりオーバーアクションでその場に倒れ込む瑠夏。

そしてチラチラと暁斗を見ながら大袈裟に左足首を摩る。

「エリヤ、やられたので足首を捻ってしまったみたいだー。」  
「これは惨事ー。乙女の大惨事だー！」

「無木、どこも怪我とかしてないのか？」

「うん。平氣です！」

そんな瑠夏には一切目もくれず、一人のやり取りは続く。

「おー、暁斗？ ああー もーー とおーー。 じーだぞー？ お前のマ  
イスイートハニーがこじで倒れてるぞーー！ じーち向けー、ちょっと  
じーち向けーー」

手招きと自分を指差す動作を繰り返す瑠夏だったが、それでも放置。

「立てるか？」  
「無理するなよ？」  
「一応病院行くか？」

「大丈夫、ありがとうございます！」遅刻してしまうので行きましょう

暁斗は奈々の手を取り立ち上がらせると、そのまま一人で歩き出した。

「 もう 一 まい 二 二 一 一 七 九 九 九 一 一 一 」

哀れ置き去りにされた瑠夏。

「……………クスン」

しょんぼりと立ち上がった瑠夏は、トボトボと学校へ向かう一人の後を追い始めた。

「といひで、ビーハして車道なんかに飛び出したんだ？」

学校までの道すがら、暁斗は当然疑問に思つ事を質問する。

「ん~……そりですねえ」

奈々は人差し指を額に当て、小首を傾げた。

やがてコクコクと細かく頷くと、思い出したかのよひに両手をパンツと鳴らす。

「ナリですそりです！ アレですよアレ！ 車が走っていたからですー！」

「…………はつ？」

この娘は何を言つてこるのだろ？

暁斗は軽い眩暈を覚えた。

そりゃ走るだろ。

車だもの。車道だもの。その為の物だもの。

「ふお？ 何か誤解されてる気が！？ 違うんです！ アレです！ 今度新発売される、『冷凍 魁！漢炒飯』さんを乗せた車が走

つてたんですね！ それはいつのまにか車道に飛び出してしまってもおかしくないと思います！」

絶句する暁斗に慌てて力説する奈々であつたが、それでも充分過ぎるくらい意味が分からぬ。

「あー、まあ、その、なんだ。蕪木は炒飯が好きなんだな？」

「はーー、ちやーさんさんヤツホウです！」

やや渴き気味に話を打ち切る暁斗に、奈々は両手で小さくガツツポーズをして応える。

その姿を見て暁斗は思つ。

いつも教室の自分の席でポケーとしている蕪木とは、会話らしい会話を交わした事がなかつた。

見た目可愛らしげ蕪木は、男子間で意外に人気がある。

が、何故か蕪木をモノにしようとかプローチを掛けに行つた連中は、揃いも揃つて首を傾げながらスゴズゴと退散してくるのだ。

今回蕪木と絡んでみて、その理由が判明した。

(あまり関わらないよひじょひ……)

やつ心に決めた暁斗だつた。

「高中くんは、ちやーさんさん好きですか？」

そんな暁斗の気持ちとは裏腹に、奈々は食い入るよつた瞳で暁斗の顔を覗き込んでくる。

確かに可愛い。

「あ、ああ。好きだよ？」

内心ドキドキしながら頷く暁斗。

ベキリッ！

後方から街路樹をへし折るよつた音が聞こえる。

「ふおおお……そうですか！ ちやーはんさん好きですかあ」

心底嬉しそうに微笑む奈々。

(……まつ、いいか)

その笑顔を見てすっかりと毒氣を抜かれてしまった暁斗は、間近に見えてきた学校を眺めながら大きく伸びをした。

後方から聞こえぐる、電信柱をへし折るよつた音を聞きながら。

## フレイクタイム ヒロイン達の裏（前書き）

今回は少し本編を中心じます。

2011年 10月29日現在。

総PV100000、総ユニーク2000突破といつ事で、  
イン達に感謝をとむる企画を始めさせて頂きます。  
口代ヒロ

## フレイクタイム ヒロイン達の宴

瑠夏「何だこれは？ 突然何が始まつたんだ？」

由希奈「ああコレね。何かこの作品の総PV数の10000達成と、総ユニーク2000越えの感謝企画らしいわよ？」

瑠夏「あつ、御義姉様ではありますんかっ！ 晓斗を私に下せーー！」

由希奈「いいわよあ？ あいつ最近口應えばっかして生意氣だから、好きにするといいわ。

……それより、わざわざ本編止めてまでこんなもんを始めるなんて、作者も色々問題あるわね」

水月「そーですね。あたしなんが、まだ本編で登場してないのに！ やつあと続き書けつてんだいべらまづめつ！」

奈々「まあまあ、ちやーはんさんでも食べて落ち着いてください。余程嬉しかったんだですよ」

瑠夏「むつ？ 出たな炒飯！ 晓斗をたぶらかす極悪人がっーー！」

奈々「ふおおおおー？ いつの間にか、炒飯と呼ばれていますーー？」

……それはそれで悪くないです

由希奈「あつはつはつ！ 作者も意外だつたんじょ？ 10月13日に初投稿して暫くは、一日のユニーク数が2とか5だつたし、0の日だつてあつたんだから」

水月「そりや意外だ。たつた一週間ちょっとになると夢にも思わないっしょ」

瑠夏「うん。今や一田のゴーーク数が200を越えて、PV数も1000越えるからな……。何が起こるか分からいものだな」

由希奈「上位作品の足元にも及ばないけど、マイナーはマイナーなりの成果に驚いてるって訳ね？」

水月「お気に入り登録数も28名様。感想や評価までしてもらったりなんだね？」

瑠夏「なにっ!? それは本当か! 本当ならば、私は暁斗の嫁に成らざるを得ないではないかっ！」

水月「なんでだよっ!..」

奈々「感想を下さった『ふじのん様』『極神様』。まだ読んで下さっていますかあ〜?  
ありがとうございます!」

皐月（ううつ……緊張して話に入れない……）

瑠夏「それと、評価を下さった方。お気に入り登録をしてくれた方。作品を読んでくれいる方々。心から感謝します」

皐月（ああっ！ 何かまとめに入ってる気がする…。び、びっしょり）

由希奈「これからも『つよきや』『ひー』は、細々続いていきまやすで、お付き合いで下さると幸いです」

皐月（あつあつあつひー・ 完全にまとめに入ってるじゃないですか  
つー）

水月「それじゃグダグダ続いたこの企画も、そろそろ終わりですか  
？ … … つて、皐月ちゃん何してんの？」

皐月「ひゃうひー・？」

“ガガガガガガガガガガ”

奈々「ふおおおおおつー・？」

水月「うわわつー・？ 何？ 何これつー・？」

由希奈「だ、大災害つー・？」

瑠夏「むつー… 」の殺氣、……尋常じゃないー・」

皐月「ら、ら、ららら、ラ、ランキング投票もあ、あ、有難うござります！ 小説家になろう勝手にランキング、ジャンル別で3位になりましたっー…！」

皐月の他全員「……怖いわ」

水月「そ、それより御感想も隨時受け付けてるですよー・」

瑠夏「御感想を下さった方には、私達が感謝の返信をさせて頂きま

す

由希奈「まあ、御希望があつたらだけどね？」特に無ければ作者から  
の返信をお送りします」

奈々「待つてますよおー！」

皐月「うへ……ぜ、ぜぜぜ是非お願ひしますつーー。」

水月「それでは今回は！」とまでつ…。」

全員「ありがとうございますーーー！」

## 2年C組の人々

### 暁斗達が通う【静稜学園】

田舎という事」ともあってか、生徒数があまり多くはない。

校舎自体は三年前に改修工事が行われた事もあり綺麗だが、特に特筆する事もない、いわば普通の学校である。

「やれやれ、何とか遅刻せずにすんだな

「はい、良かつたです」

教室に入った暁斗と奈々は、クラスメイト達に挨拶を交わしながらそれぞれの席へと移動しする。

鞄を机の横に設置されたフックに掛けた暁斗は、頬杖を付きながら少し離れた席に座る奈々をぼんやりと眺めた。

(やれやれ、大変だったな)

何故か幸せそうに口笑顔の奈々は、暁斗の視線に気が付くと、こちらに向かって小さく手を振ってきた。

「うう……」

思わず赤面しながら田を逸らす暁斗。

『武藏野やめりつー、何するつもりなんだ!』

『止めるなつ！ 暁斗が！ 暁斗が炒飯の毒牙に掛かりつとしているんだつ！ こんな壁、ぶち抜いてくれるつーー』

『瑠夏ちやんつー、何？ 炒飯つて何つー？』

隣の教室はちょっととした騒ぎになつてゐるようだが、今の暁斗の耳には届いていない。

「おい、何赤い顔してんだよ？」

俯いていた暁斗は、掛けられた声に反応して顔を上げると、そこに一人の男子生徒が立っていた。

「ああ、何だ。ミヅカ」

声の主を確認した暁斗は、あかられもこやる仮がない態度で応える。

『ミヅカ』 ひと溝口 慎一（みどりか しんいち）。

暁斗が転校してきた時からの、自称暁斗の親友である。

「お前、さつき奈々ちやんと一緒に教室入つて来ただつ？ まさか一緒に登校してきたんじゃないだらうな？」

いきなり詰め寄つてくる慎一。

「ああ、色々あつてな」

正直朝っぱらから鬱陶しいなと思いながら返事をする暁斗に、慎一は頭を抱えて絶叫し始めた。

「マジかよチクショウ!! 僕なんかなあ!! 朝のニュース観てて、画面の向こうの女子アナウンサーと目が合つただけでドキドキしてんのにお前って奴はっ!!」

……真性のダメ人間だ。

身悶える慎一を自分の前から突き放すと、暁斗は無言で授業の準備をし始めた。

## 2年C組の人々2

コツコツと靴音が聞こえ、窓に教室へ向かって廊下を歩いてくる人物のシルエットが見えると、生徒達は談笑を止めて各自の席に着き始めた。

カラカラカラ。

教室のドアが遠慮がちに開き、おずおずと顔を出す人物。

2年C組担任教師、国籠 嘉苗（くにの竹 かなえ）である。

重たい足を引きずる様にし、たっぷりと時間をかけて教壇へ上がった嘉苗は、生徒達を見渡すと静かに口を開いた。

「先生、とっても不幸です」

朝の挨拶のセオリーを無視し、開口一番の言葉がこれである。

常にどんよりとしたオーラを身に纏い、発する言葉がネガティブまつじぐらの彼女は、生徒達から『ミス マイナス思考』と呼ばれている。

セミロングの黒髪が良く似合つ、とても可愛らしい外見の持ち主なだけに、非常に残念な女性だと周りから思われていた。

「今朝、黒猫が先生の前を横切りました」

言いながら嘉苗はチョークを手に持つと、黒板に向かい何か書き始めた。

### 【白題】

「……なので、先生はお祓いに行かねばなりません。後は宜しくお願ひします」

言つが早いが嘉苗はさつと教室を出て行ってしまった。

教室内に暫しの静寂が訪れる。

呆気に取られた生徒達は、ある事を思い出していた。

国籠嘉苗は、お祓いに給料の七割を掛けている……ところの尊である。

この様子ではその噂は事実なんだらうなと、  
その場にいる全員が感じていた。

「てりやてりやてりやてりやあつ……」

その時、教室を支配していた静寂を打ち破る賑やかな声と、教室に向かい爆走してくる足音に、生徒達は驚いて廊下に目を向ける。

ガララッ……

先程の嘉苗とは打つて変わり、勢い良く教室のドアが開かれた。

「羽田水月、ただいま見じやわつ……？」

ドアを支えにブレーキを掛けようとした羽田水戸だったが、自身の勢いが強過ぎて止まりきれず、そのまま壮絶な音と共に廊下を転げながら通り過ぎていった。

教室のドア付近には、持ち主を失った器とコーンフレークが散乱してただけだった。

## 2年C組の人々③

「ううう……羽田水月見参」

ややあつて、ボロボロになりながら這いする様にして教室へ再登場した水月だったが、一人大騒ぎを演じた水月に対して、どうリアクションを取つて良いのか分からぬクラスメイト達の反応は極めて薄い。

「あのー、出オチに失敗した上に噛んだ拳句、盛大にすっ転んだ年頃の乙女なあたしは一体どうしたら良いのでしょうか?」

むつくりと起き上がつた水月は、半べそをかきながら口々タタタと自分 の席に着く。

やかましい奴が来た。

暁斗は隣に着席した水月を一瞥する。

「やあやあ暁斗君ではないですか。『さげんつるわしゅー』

水月は満面の笑みで暁斗に絡んできた。

……しまつた。

暁斗はチラッと見た瞬間に田が合つてしまつた事を後悔する。

「今日はアレですね？ 先生が来る前に到着出来て良かつたですよ

そんな暁斗の心情とは裏腹に、ケタケタと笑いながら話を続ける水月。

「いや、先生はもう来たよ」

黒板に書かれた文字に全く気が付いていない様子の水月に、暁斗は黒板を差して教える。

「うおっ！？ マジですか？ マジですかこれっ！？ あっちゃー全力で走つてくるんじゃなかつたあ！」

黒板に書かれた自習の文字を確認すると、水月は失意に支配された様に大袈裟に天を仰ぐ。

「まあいいや！ とにかく暁斗君」

が、次の瞬間にはもう立ち直り笑顔を咲かせている。

「なんだよ？」

忙しい奴だ。

良く言えば気持ちの切り替えが早く、表情が豊か。

悪く言えば、バカなんだろう。

暁斗は水月の顔を眺めながら苦笑いする。

「一緒に片付けてくんないかな？ 隣の席のよしみで」

水月はニンマリとしながら教室の出入口付近に散らばったゴーンフレークを指差す。

「何で俺が……」

言いかけた暁斗だったが、屈託のない子供の様な水月の笑顔を見ている内、どうでも良くなつてきた。

「つたく、仕様がないな。ほら、ちやつちやと片付けるぞー！」

「ガツテン承知つー！」

席を立ち、掃除用具が置かれているロッカーへと向かう暁斗に、水月は敬礼のポーズを決めると、嬉しそうにその後を追つた。

## お昼休みはみんな

昼休み。

午前の授業を終えた生徒達が一斉に動き出す。

「高中、学食か購買行こう……ぶわふつー」

暁斗の許へとやつて来た慎一は、横から突進して来た瑠夏により教室の端まで突き飛ばされた。

「暁斗！ お昼を一緒にしようじゃないか！」

「あ、ああ……」

壁にへばり付いたままピクリとも動かない慎一を見にしながら、暁斗はコクリと頷く。

「昼飯はどうするんだ？ パンでも買ってくるか？」

暁斗の聞いて、瑠夏は少し考える素振りを見せると、親指を自分の身体に向けてビシッと指差した。

「ああ、遠慮なく召し上がれ」

「いや、召しあがれって言われてもな……とりあえず購買行って何か買って来よ」

また暴走し始めていた瑠夏を制し、席を立つとした暁斗はクイクイと制服の袖を引っ張られた事に気が付く。

「どうした羽田？」

袖を引っ張っていたのは水月だった。

水月は暁斗の袖を持ったまま俯いている。

「あのね？ あたしね？ お腹すいてるの」

ポツリと呟く水月。

「やうが、じゃあ一緒に行くか？」

暁斗の言葉に水月は首を横にブンブンと振る。

「あたしの親が旅行行っちゃってね？ お弁当がない訳ですよ。そして、お財布も忘れちゃってお金もない訳ですよ」

そこでバッと顔を上げると、水月は瞳をウルウルさせながら暁斗に飛び付いた。

「オーッて暁斗君っ！ 朝、飯のパンフレークもぱり撒いてやつたし、このままじゃ食え死にしかば……」

「お、おこ……」

抱き付いて必死に訴える水月と、戸惑う暁斗。

そして……

「羽田……私の前でそんな暴挙に出るとは良い度胸だ。飢え死にするより先の死を選ぶ訳だな？ 良からう、せめて奥義で葬つてやろうではないか！」

怒り心頭の瑠夏。

「あわわっ！」

瑠夏の半端ではない圧力に、水月は慌てて離れる。

「うえーん！ お腹すいたよおーひもじーよおー！」

「分かつた分かつた！ パンくらいなら奢つてやるから騒ぐな」

手足をバタつかせて泣く水月を見兼ねた暁斗が口にした言葉を聞いて、水月はパアッと明るい表情に変化した。

「本当？ ホントに本当？」

「ああ、だから早く行こうぜ」

暁斗は膨れつ面で腕に絡み付いている瑠夏を少し気にしながら、水月に向かって微笑む。

「うんっ！ ！」

三人は購買に向かうべく教室のドアを開けた。

「ちやーはんせんターイムです！」

そこには炒飯が山盛りになつた鉄鍋を持った奈々が一コ一コしながら立っていた。

## お昼休みはみんなどう

昼休みの教室の片隅で、山盛り炒飯入り鉄鍋を囲む四人。

とつてもシユールな光景である。

「しかし、何だつて炒飯なんだ？ 昼飯ならパンや普通の弁当でいいだろ？」

自習の時間を利用して、家庭科室でわざわざ作ってきたという出来たて炒飯を眺めながら暁斗が言つと、途端に奈々の顔から笑みが消えた。

「高中くん……好きって言いました。ちゃーはんさん好きって言いましたっ！－」

「つあつ……！」

普段おつとりしている奈々とは思えない迫力にて、一同驚きを隠せない。

「ま、まあ、その、何だ。折角だから冷めない内に頂いてー。な？」

焦った暁斗の提案に全員コクコク頷くと、一斉に支給された蓮華を炒飯に伸ばした。

「ああ、召し上がる」

先程とは打つて変わり、いつものほんわかスマイルに戻った奈々。

「美味いっ！！」

炒飯を一口食べた瞬間、満場一致で賛美の声が上がった。

「ふう……」

仲川皐月は軽く溜息を吐くと弁当の蓋を開じる。

昼休みになると、生徒達の多数は中庭に移動して、友達と談笑しながら各自思い思いのランチタイムを満喫している。

皐月は中庭の目立たない場所に設置されたベンチに座り、その楽しそうな光景を一人羨ましそうに眺めていた。

そんな中、校舎の一階の教室から歓声が聞こえてきた。

あれはC組？

皐月は何事かと田に向ける。

「楽しそうだな……」

皐月は淋しげに呟いた。

自分もあの輪の中に加わって、一緒に笑えたならどんなに楽しいだ

ねい。

しかし、皐月にはそんな楽しい学生生活の思い出など皆無だった。

常に一人。

それが皐月が歩んできた道。

皐月は目を伏せると、下唇を軽く噛んで立ち上がる。

もう一度だけ笑い声で溢れるC組の教室に目を向けると、しょんぼりとその場を立ち去つて行つた。

「どうした暁斗？」

2-Cの教室では、すっかり奈々の炒飯を平らげた暁斗がぼんやりと窓の外を見ていた。

そんな暁斗の様子を気にした瑠夏が声を掛ける。

「いや、前から気になつてたんだけど、いつも僕になると一人で弁当食べてる娘がいるなと思つて」

「ん~どれどれ？」

暁斗の言葉を聞いた水月が窓の外を覗き込むと、奈々と瑠夏もそれに続く。

しかし、すでに死の娘……皐月の姿はそこには無かつた。

## お昼休みはみんなどう

「何だ瑠夏ちゃん、あの娘知らないの？ 同じクラスだろ？」

突然の声に窓の外を覗いていた全員が振り返る。

声の主は慎一だった。

瑠夏は慎一の姿を確認すると、やや怪訝そうに口を開く。

「誰だお前？」

「昼休み開始そろそろ壁にめり込む勢いで突き飛ばした相手に向かって、誰だ扱いはないんじゃないかな！？ 僕ですよ！ 溝口慎一ですよ！ 思い出してくれましたか？」

予想外の瑠夏の反応に囁み付く慎一。

若干涙目である。

瑠夏は腕組みをして眉間にシワを寄せながら首を傾げていたが、やがて納得したように慎一を指差した。

「ああ思い出した！ パナ男！ パナ男じゃないか！」

パナ男とは瑠夏が使う、慎一に対する呼び名である。

瑠夏曰く『まるで酢豚に混入しているパイナップルの様な存在の男』とこう意味を込めた略語らしい。

ちなみに瑠夏は酢豚に入っているパイナップルが大嫌いだ。

「あの……パナ男って呼び方、そろそろ止めてもらえませんかね？」

「ゲンナリした様子で懇願する慎一だが、瑠夏は全く気にする気配はない。」

「ところでパナ君、さつき居たって人知ってるの？」

と、水月。

「とてもとても気になりますので、教えて下さい。お願ひしますです  
すパナさん」

と、奈々。

「いいからさしつかと言えよパナ」

と、暁斗。

「ちょっと待てっ！ 寄つて集つてパナパナ言つなー！ 特に高中  
！ お前普段と呼び方変わってるじゃないかー？」

涙田どころか、すでに泣いている慎一が各人指差して猛抗議をする。

「五月蠅いパナ男。これ以上騒ぐならば、今すぐ息の根を止められ  
るか、息の根を止められるかの何方かを選ぶがいい」

「選択の余地ないじゃんっ！？」

苛つき気味な瑠夏の鬼選択に、慎一は声のトーンを落とす。

「まあまあ、それよりも早い」と話せよパナ一昼夜終わっちまつぞ？」

慎一の肩をポンポンと叩きながら笑う暁斗。

「うう……遂に瑠夏ちゃん以外の人達にまでパナとか呼ばれるようになってしまった」

ガックリと肩を落とした慎一だが、その場にいる全員が自分の話を待っている状態に気が付き、慌てて話を始めた。

# 一人ぼっちの少女

「あの娘はB組の仲川皐月だよ。瑠夏ちゃんと同じクラスだろ?」

慎一が言つと、瑠夏は小首を傾げる。

「うーん、聞いた事あるよつな無いよつな」

「B組の仲川皐月って言つたら、結構有名なんだけどなあ……聞いた事ない?」

慎一は首を傾げたままの瑠夏から視線を他の三人に移すが、一同揃つて首を傾げる。

「はいはいはいはーーいつ！ 一つ質問です！ 有名って、どんな風に有名なんですか？」

水月が拳手をしながら発言すると、慎一は少しだけ声のトーンを落とした。

「高中が目撃したように、彼女はいつも一人で行動してる。それは何故だと思う？」

フルフルと首を横に振り、分からぬ事をアピールする水月。

他の皆も同様である。

**慎一**は各人の顔を見回すと、ゆうくりと溜めながら口を開く。

「……死神。それが彼女のあだ名や。実際、彼女にコンタクトを試みた連中は、その後絶対に近寄ろうとしない。それどころか、何かしらのトラウマを植え付けられて暫く夜も眠れなくなる程らしい」

静まり返る教室。

誰もがやや表情を強張らせたまま、黙りこくれていた。

「しかし……」

その沈黙を破つたのは瑠夏だった。

「私が居る教室でそんな物騒な輩が居るとすれば、流石に気が付くはずだぞ？ いくら私が授業中、常に暁斗の気を探る事に全神経を集中しているとしてもな」

「お前そんな事やってんのかよ……」

「勿論だ。たまに我慢出来ず一ヤけてしまつ程だぞ？」

半ば呆れ顔の暁斗に力強く親指を起てる瑠夏。

「でも、俺が見る限り凄く寂しそうだったぜ？ 弁当食つてゐる間、周りをチラチラ見てるみたいだつたし」

何よりも、中庭から去る時の姿。

あれは孤独を好む者の姿では決してないと思えた。

「それでは仲川さんは、本当は寂しい思いをしていると？ 一緒にちやーはんさんを食べたいと思っているわけですか？」

奈々が身を乗り出す。

ちやーはんさん信者獲得のチャンスとでも思つてゐるのだろう。

「いや、炒飯はどうかは分からぬにナビ、俺にはそう見えたんだ」

奈々を一旦押さえた暁斗が、黒板の向いにあるB組の方に皿を向ける。

「やうか。なら、私が声を掛けてみるとこよ。クラスメイトとして」

瑠夏が椅子から立ち上がりとした時、水月が両手をブンブン振つてそれを制した。

「ちつと待つたあつ！ そこはあたし！ あたしの出番でしょー！ 誰とでも友達になれる愉快な水月ちゃんにチャレンジさせないで、一体誰がチャレンジするところのか！」

必要以上に自己アピールを繰り返す水月。

「わかったわかった！ ジャあどりあえず頼んだ。頑張つてこよ」

「あいよつー！ 任せときつー！ グッバイをよなら再びアディオスー！」

跳ねる様に、いや、実際跳ねながら教室を出ていく水月に、若干不安な眼差しで見送る一同。

「あわっ、あわっ、あわわわわわわっーー?」

B組の教室から机や椅子が倒れる音と、水月の悲鳴が聞こえてきたのは、それから暫くしての事だった。

## 一人ぼっちの少女2

ああ、何という事だろ？

次第に緊張が溶け、我に返った皐月は目の前に広がる惨状を見て絶句していた。

散乱する机や椅子。

怯えた顔をしながら教室の隅でガタガタ震えているクラスメイト達。

そして……

「あ、あ、あ、あわわわわ！」

ポニーテールを小刻みに振動させて腰を抜かしている、笑顔で話しつけてくれた女生徒。

また……やつてしまつた。

「ううっ！」

いたたまれなくなつた皐月は、両手で口を押さえながら教室を飛び出して行つた。

ともすれば嗚咽が漏れてしまいそうになる。

教室を出る時、誰かにぶつかってしまったが、今の皐月にはそれを

謝る事さえ出来なかつた。

「…………」

物音と悲鳴を聞いてB組へとやつて来た暁斗は、入り口でぶつかつて行つた女生徒の後ろ姿を見送つていた。

ぶつかつた瞬間に見えた頬に光るもの。

あれは……涙？

「…………泣いていたのか？」

思わず呟く暁斗。

「びええええんっ！！　怖かったよう！　殺されるかと思つたんだようつ！！」

B組の教室からは、水月の盛大な泣き声が響き渡つてゐる。

「おおよしょしー 大丈夫ですか？ そんな時にまちやーはんです」

「おい炒飯。意味が分からんぞ」

暁斗がB組の教室に目を向けると、泣きじやぐる水月を奈々と瑠夏が一生懸命なだめていた。

「せり言わんこいつぢやない。死神のあだなせ伊達ぢやないって事だ」

暁斗の隣でやれやれと首を振る慎一。

「おーいバナ。あれが仲川臥月か？」

「ああ、間違いないよ」

暁斗は慎一に確認をすると、思考を巡らせる。

本当に怖い人物なのだろ？

毎日休みに中庭で見る臥月の姿は、とてもやんばんな風には思えない。

そして、せつときの涙……。

「……よじつ」

暁斗は決心した表情で頷く。

「ちよつと行つてくる。羽田の事は頼んだ」

「えつ？ ちよつ、どう行くんだよーー？」

暁斗は慎一の肩を叩くと、廊下を走り出した。

臥月が走り去つていった後を追つ様に……。

## 一人ぼっちの少女③

「んっ？ 暁斗は何処に行つたんだ？」

暁斗の姿が見えなくなつた事を敏感に察知した瑠夏がキヨロキヨロと周りを見る。

「高中なら突然廊下を走つて行つちやつたよ」

「廊下を？ 一体何処へ……」

慎一が廊下を指すと、瑠夏は一瞬訝し気に眉をひそめたが、すぐにハツとして口許を緩め始めた。

「フツ……そうか暁斗め。私が暁斗の部屋に忍び込んだ時、机の上にさりげなく置いておいた婚姻届を提出しに行つたんだな？ よしつこれで私は晴れて人妻だ！ 祝え！ 全員祝福しろっ！ 遠慮なく高中夫人とか呼ぶが良いつ！！」

「……その発想にたどり着く武藏野さんて、ある意味すごいと思うんだ」

恍惚の表情を浮かべ、両手を広げながらクルクルとターンしている瑠夏に、困惑と呆れが入り混じつた顔で呟く奈々。

その頃暁斗は皐月の後を追い、校庭の方までやつて來ていた。

「どこに行つたんだ？」

ザッと校庭を見渡すが、皐月の姿は見えない。

「まさか学校の外まで出ちまつてんじやないだらうな……」

苦い顔付きで独り言ちながら、暁斗は体育館の方へと足を向ける。通りすがりの生徒に聞き回った処、皐月が校庭の方へ向かったのは間違いない。

とすると、皐月が校外に出ていなければ残された場所は体育館のみ。

「何で俺はこんなに必死になつてんだろ……」

自分でも不思議な事だが、中庭で見た寂しそうな姿と、何よりもぶつかつた時に見た涙が暁斗を突き動かす。

本当に皆が言つよつに死神なのか？

その真相を確かめたい。

そんな思いで頭が一杯になつていた。

「やれやれ……難儀な性格だな」

暁斗は苦笑いしながら体育館へ向けて走り出した。

## 一人ぼっちの少女4

体育館まで来た暁斗だったが、昼休みという事もあり人影は見えない。

「いない……か」

ここにも居ないとなれば、他に探す場所は考えつかない。

そろそろ昼休みも終わる時間だ。

暁斗は諦めて教室に戻ろうと、来た道を引き返そうとした。

その時である。

体育館裏から、風に乗つて微かに声が聞こえてきた。

体育館裏には小さなうさぎ小屋がある。

あまり生徒達の関心がないその小屋は、用務員が世話をする時くらいしか人が近付く事がないと思っていた。

事実、暁斗もその存在を忘れていたくらいである。

暁斗は転校初日に校内を案内された時以来初めてうさぎ小屋の方を覗いてみる。

そこには木材とトタン板で作られたオンボロのお粗末なうさぎ小屋

がひつそりと建てられており、その前に膝を抱えうずくまる様に座る人物がいた。

皐月である。

どうやら暁斗に気が付いていない様子の皐月は、小屋の中のうさぎ達に向かって何やら話掛けていた。

「……やっぱダメだね私。折角お友達が出来るチャンスだったのにね」

言いながら自嘲気味に笑う皐月。

「いつもそうなんだ。こぎつて時に緊張しちゃって相手を怖がらせちゃう。それじゃダメだつて事くらい分かってるんだけどね？ 気が付いたら一人になっちゃってる」

声が震え、時折鼻をする音が聞こえる。

「……どうしてかなあ？ どうして私はこうなのかなあ？ 私はこのまま一生一人ぼっちなのかなあ？ うひ、うひうつ……！」

言っている内に耐え切れなくなつたのだろう。小刻みに身体を震わせながら、ボロボロと大粒の涙がその瞳から溢れ始めた。

その姿を黙つて眺めていた暁斗は確信した。

やはりこの娘は死神なんかじゃない。

皆が言うように多少の問題はあるかもしない。しかし、今日の前

に居るのは孤独に打ちのめされて泣いている、普通の少女そのものだった。

「あの……仲川皐月さんだよね？」

暁斗はなるべく優し気な口調を心掛けながら皐月に声を掛けた。

「…………？」

暁斗の声に反応した皐月は、ビクンッと体を跳ねさせると顔を勢い良く暁斗の方へと向けた。

「俺はC組の高中暁斗。君のクラスの武藏野瑠夏の友……知り合いなんだ」

みるみる内に真っ赤になつていいく皐月の顔色に少し怯みながらも暁斗は言葉を続ける。

「う、う、う、あ……ああ」

しかし、皐月は酸欠状態の魚の如く口をパクパクさせ、声にならない声をひたすら発していた。

「一つ聞きたいんだけどいい？」

暁斗は何とか『//』を取つて『//』微笑んでみる。

「ひ、ひや、う、う、あ……？」

『//』

その笑顔を受け、緊張のリミットが臨界点に達した皐月から、大気を揺るがすドス黒い殺氣のオーラが噴出し始めた。

## 一人ぼっちの少女5

「ひめつーー？」

尋常ではないオーラに暁斗は思わず後退る。

先程まで涙しながらささげに話しかけていた可愛らしい少女が、いまや阿修羅か不動明王のような圧力をぶつけて来ているのだから無理もない。

染めてはいない天然の茶髪が逆立ち、大きく見開いた瞳の黒眼は極端に収縮。

更に強く噛んだ下唇からは一筋の血が流れている。

「う、う、ひ、ひううう……」

終いには喉がカラカラになっているのか、かすれ声で変な呻きを發する始末。

どれを取っても通常の人間に耐えられる許容範囲を大幅に超してしまっている。

他の生徒達もしかし、水月が腰を抜かしてしまったのも頷ける絶対的な恐怖がそこにあった。

「ひぐつー！　ひぐつー！　ひぐつううー！」

皐月から巻き上がる殺氣オーラが一段と勢いを増す。

うさぎ小屋のトタン屋根が音を立てて振動し出し、中にいるうさぎ達は死を覚悟したのか、小屋の隅で丸まつたまま動かなくなっていた。

そんな絶大な殺氣オーラを真っ正面から受けている暁斗もまた例外ではない。

膝は震え、全身の毛穴という毛穴は開き、生物としての生存本能が『逃げろー』と激しく警報を鳴らし続けている。

「ぐ、ぐぐつー」これは、す、凄いな……！

何故皐月が死神と呼ばれ、何故常に一人ぼっちだったのか、暁斗は身をもつて理解した。

しかし暁斗は踏み止まる。

震える膝を両手で抑え込み、真っ直ぐ皐月を見据えて一步前へと踏み込んだ。

そんな暁斗に小さく驚きの声を漏らす皐月。

経験上、この段階でこんな行動を示した人は一人もいない。

腰を抜かしながら這いする様に逃げ出すか、脱兎の如く全速力で逃げ出すかの二択だった。

しかし今日の前にいる人は違う。

全身を震えさせながらも、腰を抜かす事もなく、それどころか徐々に自分に向かつて歩み寄つて来てくれている。

「ビ、ビツして……？」

初めての経験から戸惑いを強める毘月。

「ビ、ビツしてもへつたくれもねえよ……」

暁斗は強張つてしまつている頬の筋肉を無理矢理釣り上がらせて笑顔を作つてみせる。

「！」のくらし、俺が経験してきた恐怖に比べたらどうって事ねえんだよっ！」

そう叫ぶ暁斗の脳裏には、姉 由希奈の顔が浮かんでいた。

～その頃の由希奈～

「クシュンッ！ ああごめんなさいね？ ビックのジェントルメンが私の噂をしてるみたいで。えつ？ あー、診察ね？ はいはい。えーと、咳、発熱、関節痛、喉の痛みだったわね？ それは恋の病です。お大事に」

暁斗は幼い頃からやりたい放題だった由希奈に逆らった時に見せられた地獄を思い出し、ブルリと身震いをする。

瑠夏にしてもそうだ。

グリズリーを一撃で葬り去る攻撃力を持った人間に日々付き纏わっている暁斗にとって、殺氣だけの星月は真の恐怖ではないのだ。

# 一人ぼっちの少女 了

「だから……俺は逃げたりはしない」

言いながら暁斗は皐月に手を差し伸べる。

「来いよ」

「えつ……？」

予想外の展開に困惑の色を隠せない皐月は、少々間の抜けた声を上げた。

「何間抜けた声出してんだよ。寂しかったんだろう？ 一人じや辛かつたんだろう？ だから昼休みに楽しそうに飯食ってる奴らを羨ましそうに見てたんだろう？」

暁斗は更に手を伸ばす。

「だつたら来いよつ！ 僕が友達になつてやる！ それにもつと友達を増やしてやるー だから来いつ！ 一人で泣いてんじゃねえつ！！！」

「…………」

暁斗の言葉に、皐月の瞳から涙が溢れ出る。

それは先程までの悲しみの涙とは違う、感極まつた嬉しさのあまり

に溢れた涙だつた。

「あ、あ、ありがとうございます……畠中さん」

今やすっかりと殺氣のオーラが消え、普通の少女に戻つていた皐月が、差し伸べられた手に恐る恐る触れようとすると。

しかし、手が触れようとした瞬間、暁斗はすっと伸ばした手を引く。

驚いた顔で暁斗の顔を見る皐月。

すると暁斗は一ツコリと笑いながら、人差し指をチツチツと横に振つた。

「高中生なんじゃなくて『暁斗』だろ？ 呼びにくいや『暁斗君』でも可。友達なんだから、もつとフランクに行いつか！ な？ 鞠月！」

そう言つて再び手を伸ばす暁斗。

「はっ、はっ、はーっ！宜しくお願ひします暁斗君っー！」

満面の笑みを浮かべた皐月は、今度こそ差し出された手を握り返した。

「じゃあ行くつボーゲー。休みも終わっちゃう」と

暁斗は掴んだ手をグイッと引っ張る。

「はいっ！」

皐月は嬉しそうに大きく頷くと、暁斗と共に走り出した。

こうして孤独だった少女は念願の友達を手に入れ、一人ぼっちで過ごしていた寂しい日々に終止符を打つたのだった。

## 友達をつくれり！

「……なるほどねえ。お昼休みに突然いなくなつたと思つたら、そんな事してたんだ」

放課後、暁斗から事の成り行きを聞いた水月は、椅子の背もたれに寄り掛かりながら周りの反応を伺う。

生徒達が帰宅したC組の教室には、暁斗に集められた瑠夏、奈々、水月、慎一が暁斗の話に耳を傾けていた。

「うむ

腕組みをして話を聞いていた瑠夏が、何かに納得した様子で頷くと、カツと瞳を見開いた。

「ギャップ萌えだな？」

「……はつ？」

突拍子もない瑠夏の発言に、暁斗を始め全然が頭の上にクエスチョンマークを出現させながら瑠夏を見る。

「アレだ。普段は恐ろしい感じの娘が、実は可愛らしかったとかいつて、そのギャップに世の男性からやたら支持を受けたりするヤツだろ？」

言いながら瑠夏は傍らに置いてあつた自分の鞄を「ゴソゴソ」と漁る。

そして、中から猫の耳がついたカチューシャを取り出すと、そのまま自分の頭に装着した。

「えっと、瑠夏さん？ 何をしてるのかな？」

意味不明な瑠夏の行動、そして言動に、どう対処して良いのか分からぬ曉斗。

「ちょっとした対抗心だ。気にするな……『にゃん』

「いや、無理に『にゃん』とか付け足さなくていいから。そもそも色々間違ってるし」

斜め上の思考で突っ走る瑠夏に困り果てた曉斗は、助けを求める様に周囲の人間を見ると、それに感付いた奈々が直ぐ様発言をした。

「でも襖を閉める猫って、化け猫らしいですよ？」

「全然助け舟になつてねえじゃねーかつ！ これ以上話を脱線されるんじやねえつ！！」

ただ話を拡大させただけの奈々に、曉斗が盛大にツッコミを入れる。

「ままま、落ち着いて。要するに、あたし達が仲川さんの友達になればいいんでしょ？」

場の雰囲気を読んだ水月が話を元に戻す。

「でもさ、羽田ちゃん大丈夫なの？ 腰抜かす程怖がつてたじゅん

昼休みの出来事を回想しながら慎一が問うと、水月はニカッと笑つて親指を起ててみせた。

「大丈夫！あの時は正直怖かつたけど、ちゃんと事情を聞いた今となつては全然平氣ですとも！」

と、戯ける水月。

「ところで高中くん。何で私達にこの話を持つてきたんですか？武藏野さんはともかく、お友達を作るというなら、最初は同じクラスの方達の方が良いと思つんですよ」

奈々が疑問を投げ掛けると、暁斗の表情が僅かに強張る。

「えつ？あ、いや、ここに集まつてもりつたメンバーだったら、皋月を色眼鏡無しで快く受け入れてくれると思ったんだ！ほら、皆優しいしな！」

皋月があんなだから、まずはおかしな集団であるこのメンバーから友達にしてしまおうとこうつ田論見があつた事は、口が裂けても言えなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5508x/>

---

つよきやらっ！

2011年11月23日12時52分発行